

羊欄とはなにか
— イギリス農業の一局面 —

國 方 敬 司
(山形大学名誉教授)

山形大学紀要（社会科学）第51巻第1号別刷
2020年7月

研究ノート

羊欄とはなにか — イギリス農業の一局面 —

國 方 敬 司

(山形大学名誉教授)

先日の夕刻、丘陵にすわって下方の収穫の光景を眺めていた。わたしには、それが真正のイングランドを描く一枚の絵を眺めているように思われた。わたしが生まれるはるか以前に先祖がここで収穫作業をしていたのだし、そしてわたしが土の下に眠りについたあとも、いく世代かあとの者がこれらの畑で収穫作業をするのだろう、と思った。この人をひきつける絵が与えるメッセージは、はやりの宣伝文句を無断借用させる誘惑にわたしを衝き動かし独りごちた。「これがイングランドだ、これが——これがイングランドだった、これが——そしてこれがこれからも変わらずイングランドでありつづけるだろう、これが」と。

Street, A. G., *Country Days*, Faber and Faber, 1933, pp.257-258.

1 はじめに

イギリス農業については、多くの研究が蓄積されている。このことは周知のとおりである。かつては、椎名重明氏や飯沼二郎氏、あるいは楠井敏朗氏などによる農業革命にかんする重厚な研究がつぎつぎと発表されてきた¹。近年では、環境政策とのかかわりや、EUの農業政策とのかかわりといった観点からの研究も公にされている²。

そうした研究蓄積にもかかわらず、意外にも視野の外におかれてきたのが、その具体的な農作業のやり方、あるいは技術的な側面である。これは、いまに始まった欠落ではない。すでに1970年代に友松憲彦氏によって指摘されている。すなわち、「わが国におけるイギリス農業革命の研究は、議会困込みやヨーマンの消滅といったこの変革の社会的側面に関する諸問題につ

¹ 代表的な著作として、椎名重明『イギリス産業革命期の農業構造』（御茶の水書房刊、1962年）；飯沼二郎『農業革命の研究——近代農学の成立と破綻』（農山漁村文化協会、1985年）；楠井敏朗『イギリス農業革命史論』（弘文堂、1969年）。

² 福士正博『環境保護とイギリス農業』（日本経済評論社 1995年）；森建資『イギリス農業政策史』（東京大学出版会、2003年）；並松信久『農の科学史——イギリス「所領知」の革新と制度化』（名古屋大学出版会、2016年）；武長玄次郎「イギリス農業史研究と環境論——コモンズの悲劇をめぐって」（『木更津工業高等専門学校紀要』第49号、2016年）ほか。

いては数多くの成果を生んだが、それに比較してこの変革の技術的側面については、従来必ずしも十分な関心が払われてこなかったように思われる。」³と。

本稿は、1930年代から1940年代に公刊されたA. G.ストリート（Arthur George Street）の著作を読んでいて、わたし自身も具体的な農作業にかんしては必ずしも十分に理解していないことを痛感し、その反省を起点にイギリス農業にかかわる具体的な農作業を紹介しようとするものである。本稿で検討しようとする羊欄（sheepfold）についても、イギリス農業の特徴の1つとしてしばしば言及されるが、それが実際にどのようなものであったのか、といった点については述べられることはほほなかったように思われる。わたし自身も、羊欄については触れておきながら、それが実際にどのようなものであったのかはわからないままに、その効能等について論じてきた。そのような意味で、この紹介文を書くことで、いくらかなりともイギリス農業の具体像を知ること資することができるのではないかと考える⁴。

ストリートの代表作は1932年にFarber & Faberから出版された*Farmer's Glory*である。この著書はかれの出版した最初のものであると同時に、イギリスでは非常に長く愛されつづけた本でもある。1983年にはOxford University Press paperbackとして出版された。現在は2017年にLittle Toller Booksから出版されている。1世紀近く愛読されているのである。なお、OUP版は重大な欠落があるので、本稿ではLittle Toller Books版を用いることにする⁵。

1930年代前後のイギリス農業は、農業機械が大幅に導入され、それまでの手作業にとってかわりつつあった。本稿で活用する*Round the Year on the Farm*を通読すると、いかに農法・農作業、そしてそれらに使用する農具・機械が変化しているのかが描写されている⁶。また戦間期は、「古くからの、主として地元向けで安定した農場経営体制の確固たる地盤から、より近

³ 友松憲彦「イギリス農業革命期における脱穀作業の技術革新について」（『北海道駒沢大学研究紀要』（第9・10号、1975年）49頁。

⁴ 羊欄について少しく踏み込んで説明した論考として、藤田幸一郎『ヨーロッパ農村景観論』（日本経済評論社、2014年）109頁。

羊欄と同様、ウォータ・メドウズも名前だけは知られているものの、具体像は検討されてこなかった農業技術である。もっとも、わたし自身もウォータ・メドウズについて紹介文を書くまでは、単純に川水をあふれさせて牧草を育てるものと思っていたので、他人のことはいえない。拙稿「ウォータ・メドウズについて」（『山形大学紀要（社会科学）』第46巻1号、2015年7月）および「ウォータ・メドウズとウェセクス農業革命」（『山形大学紀要（社会科学）』第46巻2号、2016年2月）を参看せられたい。

⁵ Oxford版では、29頁における輪作についての説明がつぎのようになっている。

First year. Winter-sown corn, either wheat or winter oats.

Second year. Half in clover for hay, and the other half into rye, winter barley, and vetches for spring sheep keep, followed by swedes and kale for winter feeding. The clover was alternated on to the other half every four years, as clover will only grow successfully in this district once in eight years.

Fourth year. Summer roots, usually rape and turnips.

容易に想像できるように、*Third year*が欠落しているのであって、Little Toller Books版の35頁ではつぎのようになっている。

Second year. Spring corn, oats and barley.

Third year. Half in clover for hay,……

つまり、“Spring corn, oats and barley. *Third year.*”の部分が欠けているのである。

⁶ Street, A. G., *Round the Year on the Farm*, Oxford University Press, 1941.

代的で、グローバル化した商品生産の農場経営体制⁷へと移行していく時代でもあり、ストリートも、父親の時代からつづけていた穀物生産を放棄し、生乳生産・販売に特化していく過程が生々しく綴られている⁸。

とはいえ、農作業には大きく変化した点と基本的にはほとんど変化しなかった点があった。したがって、特定の作業がどの年代にまで遡っておこなわれたやり方であったのか、その中で変化している点があるとしたら、それは本質的なものであったのかどうか、それらを確認する必要があるであろう。

ストリートはウィルトシアの丘陵地帯のファーマ (farmer) として農業を営んでいたのだから、かれの著述はウェセクス地方の農業を中心として描かれていることになる。農業は地域によって生産品目も、生産方法も、そして同じ作業であってもそれがおこなわれる季節も異なってくる。たとえば、羊の出産についていえば、ウィルトシアでは1月に始まるが、北に行けば遅くなり、ウェイルズの山岳地帯やカムバランド、そしてチェヴィオト丘陵ではようやく4月になって仔羊が生まれるという⁹。こうした地域差や時代的な変遷をも考慮しながら、検討を進めていきたい。

最後に、ストリアートの著作に対する評価についてひと言触れておきたい。かれの作品は、わが国ではほとんど知られていないようであるが、イギリスでは非常に高く評価されている。また、かれは、BBCのラジオ番組Any Questions?の回答者パネリストの一人としても有名であったし、かれの作品*Strawberry Roan* (1932) は映画化されたようでもある¹⁰。最後のまとめとして、Matthew Naylorの言を引用しておきたい¹¹。

1932年に書かれた*Farmer's Glory*は まちがいなくかれのもっともすぐれた作品である。それは農業についての影響力をもつ教科書 (あなたがコベットの*Rural Rides*を読みこなすだけの闘志をもっているものでなければ) であり、地方に対するイギリスの工業化の影響についてのもっとも重要な歴史的な記録でもある。

2 休閒飼料作物と羊欄

ノーフォーク農法の展開はイギリス農業革命の論争史において常に議論の中心にあった。従来

⁷ Street, *Farmer's Glory*, p.9. これは同書に収められているJames RebanksのIntroductionで述べられている言。

⁸ *Ibid.*, Chaps. 20-22.

⁹ *Round the Year on the Farm*, p.42.

¹⁰ Street, Pamela, *My Father, A. G. Street*, Robert Hall, 1969 (1984), Chap.7. Wikipediaの<A. G. Street>も参照のこと。 https://en.wikipedia.org/wiki/A._G._Street.

¹¹ Naylor, Matthew, "The Enduring Appeal of A G Street," *Farmers Weekly*, 30 October 2009, <https://www.fwi.co.uk/farm-life/fw-75-the-enduring-appeal-of-ag-street>.

表1 ノーフォク農法の輪作

	カブ	オオムギ	クロウヴァ	コムギ
1月	カブ栽培のための泥灰土施用	カブの積み出し（残存分）		
2月	泥灰土施用	カブ地の耕作		施肥
3月		条播	条播	中耕・施肥
4月		3月に播種されなかった分の播種		
5月			定められた乳牛の放牧	
6月	播種・施肥		刈取の準備	
7月	中耕（1回目）	刈取の準備 早刈りの開始 収穫期	干し草づくり	
8月	中耕（2回目）			収穫期（穂刈または刈取わらの積み上げ）
9月			小麦の播種の準備 犁耕 播種	株の整理
10月				
11月	カブ地への飼育牛の放牧	脱穀（家畜飼養用の麦 わら確保のため）		脱穀（家畜飼養用の麦 わら確保のため）
12月	カブ地への飼育牛の放牧	脱穀（家畜飼養用の麦 わら確保のため）		脱穀（家畜飼養用の麦 わら確保のため）
1月	カブの積み出し（残存分）			カブ栽培のための泥灰土施用

注）この表は、楠井氏がA. Young, *The Farmer's Calendar*から作成された「ノーフォク農法を採用する資本主義的農業経営の労働過程」（楠井、前掲書、89頁の表3）に依拠して、表記などを改めて作成したものである。

の三圃制農法は休閑期を含む3圃輪裁式であった。それが4圃輪裁式へと転換したのがノーフォク農法である。この農法のコアは、楠井氏が作成した表（表1）から容易にわかるように¹、休閑期を廃絶しカブやクロウヴァといった飼料作物の栽培に転換したことにある。これにより飼育できる家畜の頭数を増やすことができる。これは厩肥の増産に結びつき、最終的には穀物の収穫量の増大に結びつくと考えられてきた²。

この論理は、一応筋道が通っているようにみえる。しかしながら、すでに指摘したことがあるように、この論理は単位面積当たりの収量増大にはあてはまっても、耕地総面積の穀物収量

¹ 楠井、前掲書、89頁の表3。

² この飼料作物の増大による穀物収量の増大という論理はプロザロウによって20世紀はじめには指摘されている。拙稿「イギリス農業革命はどのようにとらえられるべきか——プロザロウ再読」（『山形大学紀要（社会科学）』第44巻第2号、2014年）10頁。

さらにいえば、19世紀はじめには、この考え方の原型はすでにあらわれている。拙稿「『大英百科事典』にみる19世紀はじめのイギリス農業」（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第9号、2012年）23頁を参照されたい。

についてはあてはまるとはかぎらない³。三圃制農業では耕地の3分の2までが穀物栽培に割りあてられている。それに対して、4輪作のノーフォク農法では穀作面積は2分の1にまで減少してしまう。すなわち、穀物栽培に割りあてられる耕地面積の減少と単位面積当たりの収量増大との釣り合いが問題となるのである。

ノーフォク農法について語る時、穀物栽培が重視されがちであった。それに対して、ウェイド・マルティンスとウィリアムソン (Susanna Wade Martins & Tom Williamson) はつぎのように指摘する⁴。

18世紀の新作物と新たな輪作の採用から生じた家畜の飼育頭数の増大については、ほぼ穀物生産の観点から論じられてきた。家畜はそれ自身の商品価値としてよりも、むしろ主として厩肥生産者として検討されてきた。しかし、イースト・アングリアのように一段と穀作にシフトする地域でさえ、畜産がファーマの富の重要な源泉でありつづけた。1787年になってもマーシャルは、ノーフォクのファーマの「潤沢な資産」は穀物栽培からではなく、家畜の取引を通して形成されたのだ、と主張することができたのである。(強調点、國方)

要するに、ファーマにとって家畜の飼育頭数の増大は、たとえ穀物生産量がそれほど増えなかったとしても収益の増大には結びつきのだから、飼料作物の栽培面積の拡大は当然の選択肢だったといえよう⁵。

表1によれば、ノーフォク農法ではカブの栽培のあとにオオムギが播種されることになっているが、実際にはもっと複雑であったようである。ヤング自身が土壌の性質ごとに示している最良の輪作として、たとえば良質のローム土壌の畑ではつぎのような作付けを推奨している⁶。
1.カブ、2.オオムギ、3.クロウヴァ、4.コムギ、5.キャベツ、6.エンバク、7.飼料・緑肥ソラマメ (tares)、8.オオムギ、9.ソラマメ (beans)、10.コムギ、あるいは1.カブ、2.ルタバガ、3.オオムギ、4.クロウヴァ、5.ソラマメ、6.コムギ、7.ソラマメ、8.コムギ。この例示から判断すると、土壌の性質と農場経営者の選好によって多様な輪作がありえたとみるのが穏当であろう。とは

³ 拙稿「イギリス農業革命研究の陥穽」(山形大学紀要(社会科学)第41巻2号, 2011年)42頁。Williamson, Tom, *The Transformation of Rural England: Farming and the Landscape, 1700-1870*, University of Exeter Press, 2002 (rep., 2003), p.18.

⁴ Wade Martins, Susanna & Tom Williamson, *Roots of Change: Farming and the Landscape in East Anglia, c.1700-1870*, The British Agricultural History Society, 1999, p.119.

⁵ プロザロウにかかわって附言しておく、かれは、カブ栽培が家畜の肥育のために導入されたというデフォウの指摘を肯定的にとらえている。前掲拙稿「イギリス農業革命はどのようにとらえられるべきか」9頁を参照。

⁶ Young, Arthur, *The Farmer's Calendar: Containing the Business Necessary to be Performed on Various Kinds of Farms...*, London, 1804, pp.504-505. この輪作の多様性については、わが国でも早くから指摘されている。たとえば、飯沼、前掲書、183-184頁。

いえ、あまりにも詳細に区別立てをすると、全体像がつかみにくくなるので、ストリートの簡潔なまとめを示しておきたい⁷。

イングランドのほとんどの地域で普及している輪作は4年輪作であり、時にはfour-course shiftと呼ばれているものである。作物はこのようにつづく——根菜、オオムギないしエンバク、干し草用クロウヴァ、コムギ。テムズ川の南では少しばかり変更が加えられつぎのようになる——コムギ、オオムギないしエンバク、干し草用クロウヴァ、根菜。これらの輪作のどちらも農場の労働を一年を通して均一に配分するものであり、ファーマはかれにとって最適なものを選択する。これらの輪作は、もちろん耕作地にかんするものである。恒久的な放牧地のままのこされる土地もある。

こうした輪作の多様性、あるいは地域的な差異というものを前提にしたうえで、カブ畑のあとに、つぎに栽培される作物は具体的にはどのように作付けされたのだろうか。表1のように整理されると、カブが一斉に収穫され、その畑を一斉に犁耕し、一斉に播種されたかのように見えるが、実態はどうであったのだろうか。

この点で、ヤングは2月の農作業の箇所でつぎのように述べている。オオムギの播種の仕方は、「ここ数年間で、そしてこの著作の旧版が出版されて以来、サフォクで急速な進歩を遂げてきている。それは犁耕することなく、カブ畑に条播でオオムギを播くやり方である」⁸。ということで、条播機drill-machineを用いたオオムギの播種についてのべていくのであるが、ここではそのやり方には立ち入らずに、オオムギが播種されるまでにカブはどのように片付けられたのか、という点に注目すると、ヤングはつぎのように記している⁹。

これらの土地のカブは、もし土壌が乾燥しているならば羊に食ませることで片付けられるか、あるいは「乾燥していない土壌のばあい」double brast carts（馬と車輪は畝と畝のあいだでのみ動く）を用いて積み出され、その表土は霜によってある程度まで粉碎される……（後略）……

⁷ Street, *Round the Year on the Farm*, pp.35-36. ストリートは引用したように輪作について簡潔に記しているけれども、自分や父親の農場では複雑な4年輪作を実施していた。Street, *Farmer's Glory*, p.35.

1年目：冬播き穀物、コムギないし冬エンバク

2年目：春穀、エンバクとオオムギ

3年目：半分の畑には干し草用のクロウヴァ、もう半分には羊の春の餌用にライムギ・冬播きオオムギ・ソラマメにつづいて、冬季の餌用にルタバガとケールが播かれる。クロウヴァは4年ごとに畑の半分交互に作付けされる。というのは、この地域ではクロウヴァは8年に一度の時だけうまく育つからだ。

4年目：夏の根菜、通常はアブラナとカブ

⁸ Young, *The Farmer's Calendar*, p.67.

⁹ *Ibid.*, p.68. なお、引用文中の [] 内は、國方による加筆あるいは注である。以下、同様。

ヤングは、乾燥した土壌の地域ではカブ畑に羊を放牧して食べさせる、と簡単に書いているが、実際はそれほど単純な話ではない。ストリートの著作を活用しながら、非常に煩瑣で労働集約的な作業過程を紹介していきたい。ストリートの農場では、先ほど指摘してあるようにカブのあとはコムギが作付けされるので、ノーフォクのオオムギとは農作業の季節は異なってくるが、それは本質的な問題ではない。

ストリートによれば、翌年の8月にコムギを収穫するには秋に播種しなければならないが、播種の最適な期間は10月の最後の2週間と11月の最初の2週間であるという。それより早く播くと温暖な秋だと、コムギがあまりにも早く生長して冬の霜で被害を受ける。一方、遅すぎると、寒冷な天候のために種が芽を出すのに数か月かかり、そのあいだにカラスなどに播いた種が食べられてしまうのだ、と説明する¹⁰。

だから、10月のはじめは、コムギの種まきのために畑をできるだけ早く耕すべく大忙しである。コムギはカブなどの収穫のあとに栽培されるから、羊がカブを食べたあとを追いかけるように犁耕が始まるが、ストリートは土の状態によってコムギの種まきの仕方は異なってくるとして、つぎのように説明を加えている¹¹。

水はけのよい土壌——すなわち、砂地気味で、べたつかない土壌——では、ムギは条播機で播種される。この道具は長く垂直のチューブを通してコムギの種子を降り注ぐが、それらのチューブは地面と接するところに鉄製の滑り金ないし円盤 (a shoe or disc) が取り付けられている。これらはcoulterとよばれていて、表土に3インチほどの深さで溝を作る。それらは通常8インチほどずつ離れて取り付けられていて、carterがまっすぐに馬を駆りたてるなら、コムギ苗の緑色の列があたかも定規で描いたかのようにならぬように芽出しをする。

しかし、べたつく土地や、表面が少しでも湿っている時のほとんどの土地で、条播機は各コウルタ間で湿った土が詰まってしまうのでうまく動かない。そのような土のばあい、ファーマは犁耕につづいてpresserを送り出す。プレサーは約9インチほど離れて取り付けられたV字形の鉄のタイヤをもつ巨大で重い車輪を装備し、これらが耕された地面に小さな溝を作り出し、地表に波形鋼板のような畝をのこす。それからコムギの種子は撒播でまかれる。それは地面の上にとにかく種をばらまくだけである。種は落下して弾んで、プレサーによって作られた小さな溝にぼたぼたと落ち込む。つぎにハロウ (harrows) がやってきて畝を掻きならし、前述と同様に種子はまずまずまっすぐに埋められる。

¹⁰ Street, *Round the Year on the Farm*, p.14.

¹¹ *Ibid.*, pp.14-15. 同書25頁に、"PLOUGHING AND PRESSING—THE OLD STYLE AND THE NEW" というタイトルで、興味深い写真2葉が掲載されている。

この説明ののち、鳥の追いはらいや播種用の種子の確保、そして脱穀について述べられている。興味深い内容であるが、それらについては割愛することにし、この紹介文の中心的な課題である、カブ畑における羊の飼養に移ることにしよう。

カブの収穫について、前述のように、ヤングはカブを畑で羊に食べさせる、と簡略に記している。あたかも、カブ畑に羊の群れを放ち、それで事が済むかのような記述である。しかし実際は、かなり手の込んだ作業が必要であった。

羊飼いはかれの羊を2つの群れに分ける。今年の1月に生まれた肥育中の若い羊と翌年の1月に出産する雌羊たちとである。そのうえで¹²、

かれは毎日、かれの羊の一日の割りあて分のカブを囲うために四角形の柵を設営する（pitch）——すなわち、組み立てる（erect）——。若い肥育中の羊が最初に食べる。翌日には、かれらは新たな囲いに移り、一方母親たちが、前日にかれらが食べるのこしたものを食べ尽くす。

これらの年老いた女性たちは何でも食べる。わずかばかりのカブでも、雑草でも、アザミさえも食べて、あとにはただ裸地がのこるばかりである。かつてはカブ畑だった広大な畑を羊飼いが振り返って見下ろすなら、かれは、羊の群れが数週間前にカブを食べ始めた場所で、トラクタや、条播機ないし種まき機、それから馬とハロウが忙しくコムギを播種しているのを見るであろう。つぎにコムギの種が播かれる準備の整った耕された一画が目にはいり、それから犁耕をまわっている裸地が目にはいる。目を前方にやると、まだ残っているカブがあって、羊が忙しくはんでいる。かれの四角い囲いは毎日一歩ずつ前に進み、毎日カブは減っていく。

おそらく19世紀初頭と20世紀初頭とのちがいは、新たな作物の導入があるであろう。たとえばビーツとマンゴウルトである¹³。そして、これらの栽培のあと地にもコムギが植え付けられるが、これらの作物の収穫のあとには切り落とされた葉っぱが畑に散乱していて、問題を引

¹² *Ibid.*, p.19.

¹³ 拙稿「『大英百科事典』にみる19世紀はじめのイギリス農業」36-38頁を参照。表3のPlants Cultivated for Roots, Plants Cultivated for Leaves, or both Leaves and Rootsを参照するとわかるように、Beetは大英百科事典に項目として登場しない。

一方、マンゴウルトは<Root of Scarcity>として項目ではされているが、「さらなる実験が待たれる」という一文でおわっている。*Encyclopaedia Britannica*, 6th ed. Vol.I, Edinburgh, p.425.

なお、1837年刊行の著書の中でパークは、マンゴウルトについてつぎのように説明を施している。「より適切にはmangold-würzelと名づけられているが、一般にはmangel-würtzelと呼ばれている植物は、ドイツからわれわれのところにもたらされたものであり、“the root of scarcity”のタイトルのもと、故レットサム博士（Dr. Lettsom）によって畑作物としておおよそ50年ほど前にこの国に紹介されたものである……」と。この紹介から判断するに、19世紀はじめの時点では新参の作物だったといえよう。Burke, John French, *British Husbandry: Exhibiting the Farming Practice in Various Parts of the United Kingdom*, Vol.2, London, 1837, p.251.

きおこすという。1つにはそれらの葉っぱは犁耕を困難にする。しかしそれだけではない。たとえ葉っぱを土の中に埋めることができたとしても、それによって空洞が形成されて若いコムギ苗にとっては苗床として適しないからだ。と¹⁴。

そこで、11月になると、ファーマはワゴン車に十分な量の柵の資材を積み上げて、カブ畑からマンゴウルド畑に向かう。そこに羊飼いがやってきて方形の羊欄を組み立てる。それからかれは犬と一緒にカブ畑に戻っていき、かれの雌羊の群れを新たな食卓に追い立てる。「マンゴウルドの葉は肥育中の羊には結構な食べ物とはいえないだろうが、雌羊には十分な餌になる。彼女たちがすっかり食い尽くすと、囲いは毎日前進していき、彼女たちのあとにはあたかもブラシがかけられ、くしけずられたかのようにこぎれいな地面がのこされる。言い方を変えると、犁がうまく仕事をやり遂げられる状態になっているのだ」¹⁵。

これまで紹介してきたように、カブ（あるいはマンゴウルド）畑に穀物を作付けするために羊にカブを食べさせるといっても、カブ畑に単純に放牧するわけではない。羊欄を作りそれを毎日少しずつ移動させて食べさせるのである。しかも、仔羊のあとで翌日には雌羊に食べ尽くさせるといった、非常に手間ひまをかけておこなわれていたのである。

3 農業革命期の羊欄

前章で紹介したように、羊欄はきわめて手間ひまをかけておこなわれていた。つぎに検討しておきたいのは、この羊欄のやり方は20世紀近くになって工夫されたものであるのかどうか、また、さきに紹介したような土地の肥沃さを維持するためだったのか、といった点の確認である。まずはヤングの時代について確認していこう。

この点について1837年刊行の著書においてパーク（John Burke）はつぎのように指摘している。アブラナやカブを羊に食べさせるには、乾燥した土地と湿った土地では異なる。この点はヤングも指摘したところであるが、パークはさらに、乾燥地において畑でカブを羊に食べさせるのは、羊の糞尿が地面に効果的にまかれるからであり、「これこそまさにこの休閒作物の主要な目的なのである。しかしながら、作物すべての消費をたしかなものにするためには、畑は区画ごとに柵で囲まれるべきである」¹、と説明を加えている。

それにつづいてパークは羊欄にかんする当時の論争を紹介する²。羊欄の反対派は、当然ながらそれが羊にとって有害であり、羊毛の質を落とし肥育の妨げになる、と主張する。羊欄は耕地のために牧草地を犠牲にするものであり、「ポールを支払うためにピーターから強奪する」³

¹⁴ Street, *Round the Year*, p.26.

¹⁵ *Ibid.*, p.26.

¹ Burke, *op.cit.*, Vol.2, p.463.

² *Ibid.*, pp.464-465.

³ *Ibid.*, p.464. このベイクウエルの文言は人口に膾炙していたものとみえて、*The Complete Farmer; General Dictionary of Agriculture and Husbandry*, Vol.1, 1807(5th ed.), London, n.p.でも引用されている。<Folding-Sheep>の項を参照。

ようなものだとさえ、かのバイクウェル（Robert Bakewell）は言い放っている、と紹介する。

パーク自身は、小さな囲い込み地に区分けされた肥沃な土地では羊が移動することで土地を荒らし、羊もその移動で害されると羊欄反対派に賛同する。その一方で、羊欄の必要性をも認めている。丘陵地帯の農場については羊欄なしでは畑作は利益のある営みにならない。羊欄が良い悪いではなく、地域特性や農場経営のあり方によって羊欄を実施すべきかどうかは決められるべきだと考えていた。そのうえで、羊欄についてつぎのように述べている⁴。

羊欄は木製の柵か鉄製の柵（hurdle）で作られる（斜体、原文）、あるいは、ばあいによっては地面に打ち込まれたスパイクに取り付けられたネットで作られる。しかしより普通のやり方は、長さ約 7.5 フィート・高さ3フィートの編み枝細工で作られた柵を用いるのであり、それらは小枝で結束されていて、毎日、羊の群れが外に出されているときに羊飼いによって移動される。サリ州の丘では柵は7から9フィートの長さであるが、それらは平均距離 7.5 フィートで杭に結びつけられ、通常1つの囲い（hurdle）につき3ないし4頭の羊が割りあてられる。もし四角形にしつらえられると、それゆえ40の囲いで8日で1エイカをほぼカバーすることになるであろう。囲い地（inclosure）は毎日変更されるが、檻の3つの側面だけを移動させればよくて、前日に外側にある面はそのままにしておけばよい。檻はとどめておきたい肥やしの量にしたがって設営されるべきで、その大きさはそこに閉じ込められる羊の頭数と釣り合いがとられるべきである。しかしながら、羊が横になるのに適度な広さを超えるべきでない。というのは、もしより広い空間が与えられると、かれらは隅っこに群がり、このように閉じ込める目的である、地面に均一に糞を落とさないからである。

この引用文から判断して、19世紀前半には20世紀と同様な目的で、移動式の羊欄が実施されていたことはまちがいなからう。それでは、18世紀はどうであったのだろうか。これについては、デフォウの『周遊記』がウィルトシアの紹介の中で明確な答えをのこしている⁵。

ここで、この州のような完全なる農法にいまだ達していない諸州の観察に資するためには言及に値する一点がある。それをここまで意図的にのべるのを差し控えてきた。真相はこうだ。一般的にはSalisbury Plainと呼ばれている——しかしサウサンプトン、ウィルト、ドーセットの諸州にまたがって広がっているが——丘陵ないし平原（downs or

⁴ Burke, *op.cit.*, Vol.2, p.465.

⁵ Defoe, Daniel, *A Tour through the Whole Island of Great Britain*, Introduction by G. E. H. Cole and D. C. Browning, Everyman's Library, 1962 (first published in 1724-26), Vol.1, pp.284-285.

plains) はしばしばのべられているように、大群の羊に食^はまれるべく従来はまったく広野としてのこされていた。しかしいまや、この州で生産される穀物の量を驚異的に増大させるほどに、これらの丘陵の多くが耕起され、上述のように羊毛の量を減少させている。このすべてのことが耕地での羊欄によってなされた。それは、すべての地面で羊欄が実施されるまで一晩ごとに羊欄を新しい場所に移動させるものだった。このこと、このことだけで、これらの土地——やせこけた、そしていくつかの場所では白亜の硬い岩の上に6インチほどしか土壌がない土地——をして、谷間 (vale) のより肥沃な土地ほどの収量ではないにしても、良質のコムギを産出することができるようにした。これを述べるのみである。というのは、これらの土地の多くはファーマの家から離れていて、丘の上の方にある——ファーマは常にヴァリィの川のそばに住んでいる——ので、農場から遠く離れたそれらの土地まで畜糞を運ぶだけの価値はないだろう。そのうえ、丘の上への牽引はとても重労働だし道は悪いので、[畜糞の運搬は] かれらの雄牛すべてを殺してしまうだろう。(強調点, 國方)

この記述につづいて、スコットランドなどでこのやり方が導入されたならば、「いまは役に立たず耕作されていない荒地を効果的に改良できる」とデフォウは指摘する⁶。それだけではない。「ウィルトシャーでは、1000頭の羊を飼っているが、羊欄すべき休閑地を持っていないファーマがいたならば、かれの隣人は1000頭の羊につき一晩当たり10シリングをかれに与えるぐらいにきわめて重要であるよう思われる」⁷、と書き進めている。以上の検討から、ストリートが紹介していた羊欄は18世頃には確立していたことは確実である。

さらにいえば、Victoria County Historyに収録されているスコット (Richenda Scott) の記述から判断すると、こまかな点については不明であるが、ウィルトシャーでは中世においてもほぼ同じようなやり方が採用されていたように思われる。彼女はつぎのようにのべている⁸。

羊の群れが非常に大きいばあい、3つの恒久的なsheepfoldsを維持するのが通常であった。雌羊用と、去勢羊用と、2歳羊ないし当歳羊用で、それぞれについて責任を負う一人の牧羊役がいた。かれはfoldsの建造物の維持に責任をもっており、巨大な牧羊を営むマナの支出勘定の定期的な1項目は、これらしっかりしたfoldsの維持ないし再築のためのものである。地面に施肥するために羊が閉じ込められた移動式pensの柵は、慣習保有農ないし隷農の賦役によってしばしば提供された。DowntonとEast

⁶ *Ibid.*, p.285.

⁷ *Ibid.*, p.285.

⁸ Scott, Richenda, "Medieval Agriculture," in *A History of the County of Wiltshire*, Vol.4, ed. by Elizabeth Crittall, London, 1959, pp.21-22.

Knogleでは13世紀以降、ヴァーゲイタとセミ・ヴァーゲイタがかれらの労働地代の一部としてそれぞれ1, ないし2, あるいは3柵を作る責任を負っていた。Longbridge Deverillでは、この仕事は小屋住み農に帰しており、もし要請されれば2日のうちに5つの柵を作るか、あるいは小さなものなら1日につき3柵の割合で作らねばならなかった。しかしながら多くのばあい、早い時代から柵は賃労働で作られ、出来高払いで支払われた。たとえば、1295年にAldbourn [のmana] は58の柵について支払っているし、Amesbury [のmana] は240の柵について支払っている一方で、15世紀にUpton Scudamore [のmana] は市場においてダース単位で購入していた。畑における囲いの移動もまたしばしば慣習的な賦役の1つであって、East Knogleではセミ・ヴァーゲイタに、Heytesburyではヴァーゲイタに、Collingbourne DucisではMondaymenと小屋住み農にその役務を課した。South NewtonのChilhamptonではヴァーゲイタは領主直営地の囲いを移動させるために男か少女かどちらか一人を送り出さねばならなかった。

このスコットの引用文で、あえて訳すことなくsheepfoldsと原文のままにしておいたものが、これまで紹介してきた羊欄とは異なるものであることは容易に推測できるであろう。他方、引用文でpenと表現されているものこそが本稿で検討してきたsheepfoldに該当するものであることも容易に読み取れるであろう。

では、スコットのいうsheepfoldはどのようなものであったのか。ヘア（John Hare）は中世後期のウィルトシャーの経済と社会について検討した著書において、sheepfoldではなくsheep houseと訳したうえで、つぎのように説明している⁹。それは、冬季に羊を飼養するために建てられた耐久性のある建物であり、溝と土手、あるいは石堤で囲まれている。その囲い込み地に材木か石の基礎の上に木造骨組みの羊小屋が建てられていた。通常、その小屋は数個の部屋からなり、2つ以上のドアのあるしっかりした建物で、屋根はわらぶきであった。1318年にOvertonで建てられたものだと、礎石の上に7部屋からなる建物が建てられ、36エイカ分のわらが屋根葺きに使用されたが、ここOvertonではそうした建物が3棟あったという。

ここで中世の話から19世紀はじめにもどると、パークはこれまで紹介してきた羊欄とは別のfoldにかんしてつぎのような説明を展開している¹⁰。

⁹ Hare, John, *A Prospering Society: Wiltshire in the Later Middle Ages*, University of Hertfordshire Press, 2011, pp.48-49. スコットがsheepfoldと訳した原語はbercariaであると思われるが、たしかにLatham, R. E. (Prepared), *Revised Medieval Latin Word-List from British and Irish Sources*, OUP, 1965 (1973) でもsheepfoldとなっているのでまちがいはない。しかし、その実態からみれば、ヘアの訳の方がふさわしいように思う。ちなみに、スコットがpenと訳したものを、ヘアはsheepfoldととらえていた。Hare, *A Prospering Society*, p.68.

¹⁰ Burke, *op.cit.*, Vol.2, pp.466-467.

羊飼いを雇うにはあまりにも少ない頭数の羊しか飼っていない小さな農場では、あるいはあまりにも湿っていて休耕地に羊を放つことに耐えられない地面では、耕作地のための肥やしを確保する利益はつぎのようにして達成される。すなわち、乾燥した牧草地のしかるべき地点に、あるいは農場の敷地に隣接して——その1つの側面がフェンスの役割を果たし、建物がかなりの程度でシェルタを提供する——収容能力の大きい常設の*fold* (斜体, 原文) を保持することによって達成できる。あの膨大な量の畜糞が骨を折らずに集められることは疑問の余地なく言及に値することである。もし羊欄に乾燥した葉っぱや刈り株、あるいは収穫後の茎や麦わらが十分に敷き詰められていたならば、非常に価値のある堆肥が作られるだろう。かくして、常設の羊欄に160頭の羊を6週間入れて、毎週a loadの麦わらを敷いたばあいの実験がAnnals of Agricultureに載せられている。羊には2エイカの畑分の収穫されたカブが朝晩与えられた。結果、28 large loadsの滋養のある堆肥を産出した。それはload当たり7シリング6ペンスに値し、合計で10ポンド10シリングにのぼる。その説明は、羊の品種もカブの産出量もすべてではないので、かなり不完全であるが、しかしその麦わらがload当たり20シリングに値することや、堆肥を散布する労働が10シリングかかることを考慮すると、4ポンドの価値の畜糞をのこす、あるいは羊1頭につき1週当たり3ペンスの畜糞をのこすことになるであろう。…… (後略) ……

パークはさらに歩を進めて、「故マリイ将軍 (General Murray) は、常設の*fold* というか、*sheep-cote*と呼ぶべきものを所有していた。それは長さ57ヤード、幅20ヤードの区画を囲い込んでいて、1140平方ヤードの広さがあり、そこに夜間700頭までの羊——1頭当たり1.5平方ヤード以上の広さ——を閉じ込めることができた¹¹とのべ、さらに紹介をつづけるが、途中の説明は省くことにして、この羊小屋に対するパークの評価とかかわる箇所を訳しておきたい¹²。

この種の*sheep-cotes*は、非常にささやかな出費で造作できる。というのも、壁は、*pizé*の方法で泥と麦わらを用いて建てられるか、あるいは粗末な柱にハリエニシダで塞いで建てることができ、小屋の屋根はわらで葺かれたのであり、干し草棚は大工の助けなしで作ることができた。事実、このようなやり方で長さ60フィート幅15フィートで、屋根の下に240頭の羊を収容できるものをわずか12ポンドの費用で作ることができるといわれている。しかしながら、その床は、乾くように、石灰岩の砂利か、燧石か、碎石

¹¹ *Ibid.*, p.467. このパークの説明は、Young, Arthur, *General View of the Agriculture of the County of Sussex*, London 1809, p.349.に依拠して書かれている。

¹² Burke, *op.cit.*, Vol.2, p.468.

で敷き詰められ、しっかりと踏み固められるべきである。それらは、出産期には疑問の余地なく非常に有用であり、ひどい雨天の際には屋根のないfoldの代替物として時には有用に感じられるかもしれない。しかし、ほかのすべての観点から、このような気候のもとでは屋根付き小屋のfoldシステムをわれわれは好ましくないと考える。自然は羊に羊毛を与え、それは寒さや雨の影響からかれらを守っている。というのは、スコットランド北部の吹きさらしの山岳部においてさえ、羊たちは、吹雪の破滅的な結果に対する防衛手段としてまれに作られる檻 (stells) 以外のシェルタなしでも丈夫に育ち、オークニ諸島やシェトランド諸島で完全に戸外で暮らしている。

パークはこの説明からさらに積極的に屋根付きの羊小屋をつぎのように否定する¹³。

このやり方は、1660年頃、フランドル地方の人びとによってヘリフォドシアにもたらされたといわれている。けども、この品種 [ライランド種 Ryeland stock] の羊毛の素晴らしさは、はるか昔にカムデンによって、およそレミンスタア近傍に固有なものとして “Lempster ore” のタイトルのもと称賛されている。詩人ドレイトンはつぎのように訊ねている。

ブリテンの地の果てのどこかに、なまくらな奴が住んでいるのだろうか、
Lempster's oreの名前を聞いたこともない輩が。

しかしながら小屋飼育のやり方が引きおこすひ弱さが、結局は有害ではないというのは疑わしい。というのは、実際のところ、羊は寒さからよりも暑さから患うからだ。それ [小屋飼育] は、成功することもなく何度となくこの国で試みられてきたのであり、かの著名で聡明なファーマであるジョージ・ウェブ・ホール (George Webb Hall) 氏によってメリノ種の羊の飼育に際して、移動式の小屋とともに数年間採用された。しかし結局かれは非常に手痛い損失をこうむってその試みを放棄した。

この屋根付きの小屋における羊飼育は、先ほど紹介したヘアのいう sheep house を彷彿とさせるところがある。パークの評価が正しいものであるのかどうかは、専門家ではないわたしには判断できないが、ヘアによると、ウィルトシアにおける羊小屋も19世紀半ばには過去の遺物となっていたらしいから¹⁴、羊は暑さに弱いのであろうか。

いささか横道にそれてしまったが、20世紀はじめに実施されていた移動式の羊欄は、18世紀どころか、ウィルトシアでは13世紀には始まっていたようである。少なくとも、領主直営地で

¹³ *Ibid.*, pp.468-69.

¹⁴ Hare, *op.cit.*, p.48.

は採用されていたと考えられる。その作業の詳細については不明なので、そのやり方が全く同一であったとは判断できないものの、耕地に施肥する手段として重視されていたという点では20世紀のばあいと同断である。

4 おわりに

早期農業革命論でわが国でも広く知られているケリッジ (Eric Kerridge) が強調していたのが、ウォータ・メドウズと羊欄とであった。この両者の組み合わせこそが、ウィルトシアにおける穀物生産量を押し上げたことを力説してやまなかったことは、かれの初期の論文名が明瞭に示している¹。この意味でも、羊欄についての正確な理解が必要であると考え、いささかこまかな点にまで立ち入って紹介してきた。

羊欄とは、一定の狭い場所に閉じ込めることで、羊の糞尿を肥料として効率的に利用するべく工夫されたシステムといえる。その中で、ウェセクス地方では、広大な耕地に効率よく施肥するために、移動式の羊欄が考案され広く普及したものと思われる。また、このやり方は羊によって地面が踏み固められてしっかりとした耕地になると評価されている。こうした観点から、19世紀の論者も、移動式の羊欄なくして丘陵地帯の穀作は維持できないものと考えていたようである²。

本稿10-11頁のデフォウの『周遊記』からの引用文は、拙稿「ウォータ・メドウズとウェセクス農業革命」においてすでに引用したものである。しかし、引用しておきながら強調点部分については十分に理解していたわけではなかった。羊欄がこれまで紹介してきたような、煩瑣で手間のかかる作業によって実現されていたとの認識は、ストリートの著書にふれるまでなかった。たしかに、このような農作業について知らなくても、イギリス農業について論じることは可能である。しかしながら、ウォータ・メドウズのばあいも同じであるが、その具体的な仕組みを知ることによって、イギリス農業についての理解は豊かなものになると考えている。

最後に、19世紀後半以降のウェセクス丘陵地帯の農業にとって、羊欄がどのような意義を担っていたのかを確認して本稿を締めくくりにしたい。19世紀半ばのイギリス農業について検討するときに、まっさきに取り上げられるのはジェイムズ・ケアード (James Caird) であろう。そのケアードはドーセットシアの農業にかかわって、ハイ・ファーミングという文言

¹ Kerridge, Eric, "The Sheepfold in Wiltshire and the Floating of the Water Meadows," *Economic History Review*, 2nd Ser., Vol.6, 1954. 中世から羊欄そのものは実施されていたとしたら、近世からの白亜丘陵地帯の穀物生産量を飛躍的に増大させたのは、飼料が欠乏している早春に雌羊と仔羊に牧草を提供したウォータ・メドウズの導入によるところが大きい、と考えることができる。

² Davis, Thomas, *A General View of the Agriculture of the County of Wilts*, London, 1811, passim; Little, Edward, "Farming of Wiltshire," *Journal of the Royal Agricultural Society of England*, Vol.5, 1845, pp.168.; Caird, James, *English Agriculture in 1850-51*, Kelley, 1852 (1967), pp.184-188.

こそ用いていないけれども、その到来とともに羊欄は廢れるものと考えてつぎのようにのべる³。

グアノと骨粉の導入、そしてより近年の安価な家畜の飼料の導入以前は、羊欄の実施が、それがなければ有効に耕作を継続しえなかった土地でファーマがそれなりの穀物の生産を産み出すことを可能にしてきた。穀物の高価格が家畜への関心を下位の考慮すべき事柄とさせた。[しかし]自由貿易がこれらの相対的価値を変化させてしまい、羊欄を導入した者たちの子孫が、いまおかれている異なる立場にたいして同等の巧みさですぐにかれらの経営を適応させるであろうことは、疑いの余地がない。人工肥料や購買飼料の利用増大やカブ裁断機の一般的導入、麦わらのより効率的な利用やその栄養分のある肥やしへの転換、これらが現在の羊の飼育システムをしいだいに變化させるであろう。羊の生産物の市場価値を高め、それによって家畜からの年間の利益を増大させ、そしてよりよい飼料の消費によって穀物畑の肥沃度を高める、というシステムへと。システムとしての羊欄は、主たる生産物として羊を飼育することへの関心——当然のこととして土地を肥沃にすることは二の次になる——にとってかわられるだろう……（後略）……

金肥としての骨粉やグアノなどの購入、あるいは飼料としてのオイルケーキやレンズマメの購入が拡大するとともに、排水設備や農場施設を拡充していくという「高投入—高産出の経営構造」を特徴とするハイ・ファーマリングが、イギリス農業のあり方を変えていったことはいまさら繰り返すまでもない⁴。その点で、上記、ケアードの指摘はまちがっていない。しかしながら、単純に羊欄による施肥が廢れてしまったとみなすわけにもいかない。締めくくりとして、本稿の出発点であったA. G.ストリートの著作に戻ろう。

ストリートの父が経営していたDitchampton Farmはソールズベリ近郊に所在し、400エイカの畑と90エイカの丘陵地、そして40エイカのウォータ・メドウズと約100エイカの放牧地からなり、60頭の乳牛と400頭の雌羊が飼育されていた⁵。その農場の穀作についてA. G.ストリートはつぎのようにのべている⁶。

先ほどのべた輪作のもとでは、毎年、耕地の半分が穀作にあてられ、残りの半分が羊の群れのえさを育てるのに割かれるのは容易にわかることである。その羊の継続的で規則正しい羊欄が穀物栽培を可能にした。農場は完全に羊のために切り盛りされていたよ

³ Caird, *English Agriculture in 1850-51*, p.63.

⁴ 前掲拙稿「イギリス農業革命はどのようにとらえられるべきか」17-18頁；佐藤俊夫『イギリス農業経営史論』（農林統計協会、1991年）第3章。

⁵ Street, *Farmer's Glory*, pp.32-33.

⁶ *Ibid.*, p.36.

うに常々わたしには思われたし、[農場で働く]人びとのほとんどは、その結果としての羊飼いの強い立場に嫉妬していた。(強調点, 國方)

この一文から、20世紀に入ってもウィルトシアの丘陵地帯では、羊欄を抜きにしての穀作は考えられなかったとみてよかろう。しかしその一方で、ストリートはつぎのように嘆いてもいる⁷。

この時期 [2月・3月] までにあなたの羊は出産し、ルタバガとケイルを羊欄で食べているであろう。7月のおわりまでに、あなたはかれら羊を飼育する (keep) ために植えられたライムギなどの食い扶持 (keep) を十分に手に入れるだけで、あなたはそれを10月には羊に与える。かれらはその時からアブラナとカブをほしがるだろうから、4月にかれらがルタバガとケイルを食べるにつれ、馬たちがかれらのあとにしたがって [畑を耕し]、あなたはアブラナとカブを播かなければならない。

しかし次の冬はどうだろうか? あなたは、羊の群れのためにルタバガとケイルが必要であろう。だから、かれら羊たちが5月、6月、7月と、ライムギ、冬播きオオムギ、そしてソラマメを食べるにつれ、かれらを追いかけて犁とハロウを動かさなければならぬし、来る冬に備えルタバガとケイルを作付けしなければならない。

それは毎年毎年つづく、羊の群れにえさを与えるための間断のない、絶望的な努力。羊! 羊! いつも羊だった。あなたの生活はかれら羊に支配され、農場全体がかれらを中心にして回っていたのだ…… (後略) ……

* 本稿を執筆するに当たり、Google Booksによって閲覧できた書籍もある。ここに記しておきたい。

* 本稿は、科学研究費基盤研究 (C) 「イギリス農業革命研究の残された課題：農業は人口増大にどのようにして応えたのか」(研究代表者：國方敬司，課題番号：23530403) による研究成果の一部である。

⁷ *Ibid.*, p.42.